

# 序

## — 硬膜外麻酔，脊髄くも膜下麻酔（脊髄麻酔）の必要性 —

硬膜外麻酔，および脊髄くも膜下麻酔（以下本書のタイトルを含め脊髄麻酔と愛称で呼ばせていただきます）には百年近い歴史があり，長い間麻酔科医にとっては必須の知識であり手技であった．それゆえ局所麻酔薬の作用機序をはじめとする数々の優れた基礎研究がなされてきた．臨床的にも数々の臨床試験がなされ，個々の麻酔科医の臨床経験と合わせこれらすべてが生かされて，今日の硬膜外麻酔および脊髄麻酔を支えていると言えよう．

しかしながら短時間作用性の麻酔薬や，より末梢での超音波ガイド下のブロックの台頭といった新しい流れに硬膜外麻酔，脊髄麻酔の位置付けが大きく変化し始めている．長年盛会であった硬膜外麻酔研究会に終止符が打たれたのは記憶に新しいことであるが，これもまた時代の潮流のためであろう．ではなぜこのような時相にあらためて硬膜外麻酔と脊髄麻酔の実践本をこの世に送り出すのかと疑問に感じる諸兄もいらっしゃると思われるが，それは以下のような理由である．

まず，今まで麻酔科医の間で伝授されてきた名人技を含む硬膜外麻酔と脊髄麻酔手技や智慧を，ここでしっかりと写真や図で解説して残しておきたいと思ったからである．我々がレジデント時代に手取り足取り教えて頂いた基本とコツを，これからの若い世代にも効果的に伝える方法の1つとして本書を位置づけて頂きたい．

2つ目は，歴史のある手技ではあるが硬膜外麻酔と脊髄麻酔とも進化を続けている．超音波ガイド下の手技や電子制御の携帯ポンプがそのよい例である．これらの最先端の知識と手技を是非盛り込みたいと思ったからである．

3つ目は，硬膜外麻酔と脊髄麻酔を施行する絶対数が将来減少するとしても途絶えるとはとても考えにくく，しかも麻酔科医が習得する必要性は今後も不変であると判断したからである．

幸いにして，このような私の考えに東海大学の鈴木利保先生が賛同してくださり共同編者となっただき，羊土社のご協力を得て出来上がったのが本書である．ご多忙を承知のうえでの私の執筆願いに快諾してくださった鈴木先生をはじめとする，硬膜外麻酔と脊髄麻酔の各分野のまさしく名人である執筆者の諸先生にこの場を借りて感謝申し上げる次第である．本書がこれから硬膜外麻酔と脊髄麻酔を習得しようとしている方の一助となることができれば誠に幸甚である．

2009年 秋

編者を代表して  
岡本 浩嗣